

識者の見方



東京大教授

松田 康博氏

台湾の馬英九政権は中台関係改善を進めており、首脳会談の実現は歴史的な評価を決める総仕上げになる。過去にも可能性を探っていたが、中国側の意向で実現しなかった。今になって息を吹き返したのは驚きだ。

中国の習近平国家主席を決意させたのは、来年の台湾総統選だ。野党・民進党候補の蔡英文主席

が圧倒的に優勢で、国民党は10月になって実力者

の朱立倫氏に候補を差し替える異例の事態に陥っ

た。このタイミングの首脳会談は国民党の反転攻

勢を支援する狙いだ。会談では「(中国と台

湾は不可分という)『1つの中国』の維持こそが

平和と発展の礎になる」というメッセージを発す

るとみられる。蔡氏は政

「1つの中国」打ち出す

権を取っても「中台関係は現状を維持できる」と説明するが、「現状」のハードルが上がることで主張に疑問符を投げかけることになる。

中国寄りの姿勢が台湾社会の反発を買っリスクもあり、総統選の結果が変わる可能性は低い。中国は「1つの中国」の受け入れを求めて強い圧力をかける姿勢を示せる。民進党政権が誕生しても当面は中国への挑発的な発言や政策はより自重を迫られるだろう。